



Title	恋人関係への認知が友人関係に及ぼす影響
Author(s)	清水, 侑子; 大坊, 郁夫
Citation	対人社会心理学研究. 2012, 12, p. 183-190
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/7234">https://doi.org/10.18910/7234</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 恋人関係への認知が友人関係に及ぼす影響<sup>1)</sup>

清水侑子(大阪大学大学院人間科学研究科)

大坊郁夫(大阪大学大学院人間科学研究科)

本研究の目的は、恋人の愛着機能の認知・恋人関係の安定さの認知が友人ととの行動に及ぼす影響について検討することである。また恋人関係の認知とともに、友人との関係が重要かどうかという友人関係の認知が友人ととの行動に及ぼす影響についても検討した。本研究では行動を時間や回数(会う回数、過ごす時間など)、資源(愛情、地位など)の側面から検討する。恋人がいる135名の男女大学生を対象に質問紙調査を実施した。その結果、恋人の愛着機能の認知が低いほど友人ととの電話回数が増加し、愛情資源を分配するという行動特徴が示された。この傾向は特に二番目に親しい友人において示された。また恋人の愛着機能の認知が低く、友人関係の評価が高い人が電話行動、メール行動が多いことが示された。この傾向は一番親しい友人で示され、二番目に親しい友人においてはこのような傾向はみられなかった。最後に、恋人の愛着機能の認知と友人の行動について考察した。

キーワード： 恋人関係、愛着機能の認知、関係の評価、友人の行動、資源の分配

## 問題

本研究の目的は、恋人関係の認知が友人ととの行動に及ぼす影響について検討することである。

恋愛関係と友人関係は悩みが生じやすい対人関係であるため(高井, 2008)、数多くの研究が行われてきた。それぞれの関係での研究が主であるが、人々は恋愛関係のみ、もしくは友人関係のみの相互作用を行っているわけではなく、日常生活を営む上でさまざまな対人ネットワークを有している。その多様な対人資源を獲得することで高い心理的適応が導かれているのである(Aron, Paris, & Aron, 1995; 神薗・黒川・坂田, 1996; 西平, 1973, 1990など)。このことから1つの関係だけでなく多くの関係を同時に検討する必要があるといえよう。本研究では、さまざまな対人関係の中でも大学生にとって重要であるといえる恋愛関係と友人関係を同時に検討する。

これまでの研究によると、恋人の重要度が高く(Davis, 1985; 多川・吉田, 2006)、その重要さゆえに友人ととの相互作用に障害が生じているという。例えば、恋人ができたことによって友人と一緒にいる時間が減ったり、遊びへの誘いや連絡が減ったりすることがある(得能・佐藤, 2010)。しかしながら、必ずしもいつもネガティブな影響を及ぼしているわけではない。恋人が無条件に認めてくれる、味方でいてくれるという確信や恋人への信頼感から、親しい友人とより関わるようになることがある(北原・松島・高木, 2008; 多川, 2003)。これらの先行研究から、恋人関係による友人関係への影響は恋人から安心感を抱くことで変化することがうかがえる。

このような、恋人から安心感を得ることで周囲と関わるようになるという現象を説明し得るのが Hazan & Shaver(1987)による成人の愛着理論であろう。成人の愛着理論とは親密な関係、特に恋愛関係はその定義として愛着

関係であるとの仮定のもとに提唱されたものであり、恋人関係における強い情緒的な結びつきの関係を指している。成人の愛着理論は Bowlby (1969/1982 黒田・大羽・岡田・黒田訳 1976/1991)によって提唱された動物行動学的な愛着理論をもとに導き出された理論である。愛着理論の諸研究によると、愛着対象から安心感を得ると周りへの探索行動を行うようになり(Bowlby, 1969/1982 黒田他訳 1976/1991)、恋人との愛着が不安定な時は恋人との関係維持のために恋人との関係に注意を向け、コミットメントを強め、恋人との愛着がゆるぎないものになると恋に陥る以前の活動に戻り、互いの関係以外にも注意を向けて刺激を求めるようになる(Berscheid, 1983)。このように多川(2003)や北原他(2008)、Hazan & Shaver (1987)、Berscheid(1983)から、恋人との愛着の不安定さが周囲の人との活動を減少させ、恋人との愛着の安定が不安定時より周囲の人との活動を活発にさせるのではないかと考えられる。しかしながらこれらの先行研究は、周囲の人がどのような人なのか特定できておらず、曖昧なままである。そのため本研究では、周囲の人を親しい友人として検討を行う。また先行研究では友人とのどのような活動や行動が影響を及ぼしているのかについて検討されていない。そのため本研究ではどのような行動に影響を及ぼしているのかを検討する。

本研究では友人の行動について、“相手のために自分の持っている資源(時間など)を割く行動”と捉える。つまり友人と活動する・行動するとは、友人のために自分の持っている資源を提供することと定義する。その上で、友人と行動することにおいてまずその友人と会う回数や一緒に過ごす時間という回数・時間的側面を捉える必要があるであろう。得能・佐藤(2010)においても恋人ができたことによって友人と一緒にいる時間が減少するということ

が指摘されていることから、本研究においても時間について検討を行う。

また近年の友人同士のコミュニケーションにおいて携帯メディアによるコミュニケーションも検討する必要があると考えられる。メディアの普及によって離れていても携帯のメールで絶えずコミュニケーションを取り合い、心理的に誰かと24時間一緒にいることを求めるような「フルタイム・インティメート・コミュニケーション(fulltime intimate communication)」といわれる対人関係が指摘されている(仲島・姫野・吉井, 1998)。これは、いつでも相手とつながっている状態でいることで安心感を抱くような密着した関係のことである。このフルタイム・インティメート・コミュニケーションのような対人関係は、通話ではなくメールによって実現されることが指摘されている(中村, 2001)。メールは自分の都合の良い時に送受信でき、通話よりも安く、時間帯を気にせず送信できるという利便性(仁尾・石田・内海, 2009)から電話よりも利用される頻度が多い(新美, 2009)という理由からもメールの方が簡単に相手とつながっている状態を作りやすいと考えられる。電話によるコミュニケーションはメールよりも利用頻度が少ないものの、既存の対人関係の円滑化・活性化と日常的な対面的相互作用での不全の補償を行っており、電話が親和欲求を満たす道具であることが指摘されている(松田, 2004; 諸井, 1995)ことから、友人関係において必要なコミュニケーション行動であると考えられる。また仲島他(1998)によると、誰とでも携帯電話を通じてつきあっているのではなく、特に親しい相手との間で最もよく利用されていることを示している。このことから親しい友人関係において携帯メディアの利用行動についても検討する必要があるといえよう。

さらに過ごす時間内において行われるであろう行動として、資源を友人に与えるという観点からも本研究で検討する。具体的には、Foa & Foa (1974)による6種類の資源(愛情、地位、サービス、金銭、情報、物品)について、相手にどのくらい与えているかを検討する。

以上から本研究では恋人関係の認知が友人関係の行動に及ぼす影響において次の仮説を検証する。

仮説は以下の通りである。

- (1) 恋人の愛着機能の認知と友人との行動が正の相関関係を示す
  - (2) 恋人関係の評価と友人との行動が正の相関関係を示す
  - (3) 恋人とも友人とも関係が良好であると認知している人が、一番友人との行動が多い
- (1)、(2)の仮説においては、先行研究から恋人との愛着の不安定さが友人ととの活動を減少させ、恋人との愛着の安定が不安定時より友人ととの活動を活発にさせるので

はないかと考えられる。また愛着が安定しているということは、恋人関係が安定していると認知しているとも捉えられる。そのため本研究では恋人関係の安定の認知として愛着機能の認知とともに関係の評価も尋ねた。

また恋人関係の安定の認知による友人との行動への影響を検討する際に、友人関係をどう評価しているかによって友人との行動が変化する可能性が考えられる。友人との関係の評価が高い方が友人と行動すると考えられるため、仮説(3)が考えられる。

## 方法

### 対象者

関西圏の3つの私立大学において心理学関係の講義を受講する学生429名に質問紙を配布した。恋人がいる人が友人とどのような行動を行なうかを検討するために、本研究では恋人がいると回答した135名(男性56名、女性76名、不明3名)を分析対象とした。平均年齢は20.58歳( $SD = 1.74$ )であった。交際期間の平均は16.51ヶ月( $SD = 15.16$ )であった。

### 手続き

2011年10月17日から10月31日にかけて集団形式による質問紙調査を実施した。回答に要した時間はおよそ15分から20分であった。

### 質問紙の構成

最初に回答者のデモグラフィックな特徴を尋ね、その後で生年月日、性別、恋人の有無、交際期間を尋ねた。

**愛着機能** 山口(2009)によって作成された愛着機能尺度を使用した。愛着対象に対する愛着機能にまつわる主観的な確信や期待を測定する尺度である。この尺度では恋人に対して回答を求めた。この尺度は、「安全な避難所(5項目)」、「安全基地(5項目)」、「近接性の維持(5項目)」の3因子で構成されている。本研究ではこの山口(2009)で同じ因子構造が得られるかを確認するため、主因子法、プロマックス回転を用いて因子分析を行った。その結果、山口(2009)と一致した結果が得られ、「安全な避難所(5項目:  $\alpha = .94$ )」、「安全基地(5項目:  $\alpha = .92$ )」、「近接性の維持(5項目:  $\alpha = .89$ )」となった。回答者はそれぞれの項目について“全くあてはまらない = 1”から“非常にあてはまる = 7”的7件法で評定を行った。以後の分析では、この因子分析で得られた因子得点を各愛着機能因子の得点として検討した。

**関係評価** 関係の満足度や重要度をどのように評価しているかを測定した。本研究では、恋人関係に対する評価と友人関係に対する評価をそれぞれ求めた。中村(1991)の質問項目を参考にして作成された谷口(2004)のものを使用した。「その人の関係に満足している」、「その人はあなたの要求を満たしてくれている」といった

項目があり、全 6 項目であった。それぞれの項目について回答者は“全くあてはまらない = 1”から“非常によくあてはまる = 7”的 7 件法で評定を行った。この得点が高ければ高いほど、関係が安定していると考えられる。

**行動特性** Berscheid, Snyder, & Omoto(1989)によって作成された RCI を使用した。主観的親密感では測りきれない親密さの成分を測定しようと作成された尺度であり、久保(1991, 1993)が日本での適用を試みている。さらに谷口(2004)が改定し、調査を行っている。本研究では谷口(2004)が改定したものを用いて調査を行うことにした。本研究では久保(1991, 1993)と谷口(2004)より「接触頻度」についての項目を使用した。この指標においては一番親しい友人と二番目に親しい友人とのそれぞれの行動について回答を求めた。

**資源の分配** 恋人と友人 2 名への資源分配を測るため、Foa & Foa(1974)と中島(2006)を参考にした。資源の内訳は「愛情」、「地位」、「サービス」、「金銭」、「情報」、「物品」の 6 項目を使用した。これらの資源に関する行動を恋人、一番親しい友人、二番目に親しい友人に対してどの程度行っているかについて回答を求めた。それぞれの行動には例文が記載されており、愛情は「親密さや愛情、世話を示す行為で、暖かさや心地よさをともなう(例: 好意を示す、努力や成功をほめる、など)」、地位は「威信、尊敬、注目するか否かなどの判断を伝えること(例: 励ます、立場を尊重する、など)」、サービスは「仕事や用事などの援助(例: 仕事を手伝う、依頼・用事を引き受ける、など)」、金銭は「お金、通貨の譲渡や、それらを媒介とした行動(例: お金を貸す、食事などをおごる、など)」、情報は「助言や意見、示唆、啓発などを伝えること(例: 試験の内容を伝える、道や場所を教える、など)」、物品は「有形の製品、物品、資源の譲渡やそれらを媒介とした行動(例: 持ち物を貸す、品物を贈る)」であった。回答形式は 9.6cm の 1 本の線分を全体量として、それぞれの資源に対して誰とどの程度その資源の行動を行っているかを 3 人分に分割するよう求めた(Figure 1)。このように線分を 1 資源の全体量として回答させたのは、資源を無限ではなく、有限のものとして参加者に認知してもらうためであった。時間は無限であるが自分の時間は限られており(河合, 1971)、その時間にともなって資源も有限であると考えたからである。区切線の長さをそれぞれの関係分配得点として検討を行った。



Figure 1 資源の配分の回答形式と記入例

## 結果

### 一番親しい同性の友人と二番目に親しい同性の友人の親しさの差

本研究では、参加者に一番親しい同性の友人と二番目に親しい同性の友人との行動について回答を求めた。一番親しい同性の友人として回答された対象人物と二番目に親しい同性の友人として回答された対象人物に対する親しさが異なるかを確認することで、一番親しい同性の友人、二番目に親しい同性の友人と順番どおりに回答されているかを確認する。対応のある *t* 検定を行った結果、一番親しい同性の友人の方が有意に親しいと感じていた( $t(346) = 13.83, p < .001$ )。よって、参加者は一番親しい同性の友人と二番目に親しい同性の友人を分けて回答したといえる。

### 恋人関係の認知と友人との行動との相関関係

恋人の愛着機能に対する認知と友人との行動が関連するかどうか、また恋人関係の評価と友人との行動が関連するかどうかを検討するために、愛着機能各因子・恋人関係評価と RCI・関係分配得点の相関分析を行った。まずは一番親しい友人に対する結果を示す(Table 1)。RCIにおいては有意な結果はみられなかった。資源においては、友人への愛情資源の分配と恋人の安全基地、恋人の近接性の維持、恋人関係の評価に負の相関関係がみられた。次に友人への地位資源の分配と恋人関係の評価に負の相関関係がみられた。最後に友人への情報資源の分配と恋人の安全な避難所に負の相関関係がみられた。

次に二番目に親しい友人に対する結果である(Table 2)。RCIにおいては友人との 1 ヶ月の電話回数と恋人の安全な避難所、安全基地、近接性の維持、恋人との関係評価に負の相関関係がみられた。資源においては友人への愛情資源の分配と恋人の安全な避難所、安全基

Table 1 恋人ととの関係認知と一番親しい同性の友人ととの RCI・資源の相関関係

	恋人との関係の認知			
	愛着機能因子			恋人との 関係評価
	安全な 避難所	安全 基地	近接性 維持	
1ヶ月に会う回数	.03	-.04	.04	.01
R 1回あたりに過ごす時間	-.06	.02	.02	-.06
C 1ヶ月の電話回数	-.08	-.08	-.11	.07
I 1回の通話時間	.08	-.03	.05	.07
1週間のメール送受信数	.01	.01	-.04	.07
愛情	-.15	-.23 *	-.25 **	-.20 **
地位	-.23	-.13	-.14	-.24 **
資源 サービス	.01	-.08	-.08	.01
金銭	.01	-.03	-.02	.03
情報	-.16 †	-.13	-.05	-.12
物品	-.09	-.11	.01	-.10

注) †  $p < .10$ , \*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$

地、近接性の維持、恋人関係の評価に負の相関関係がみられた。友人への地位資源の分配と恋人の安全な避難所、安全基地、近接性の維持、恋人関係の評価に負の相関関係がみられた。友人へのサービス資源の分配と恋人の安全な避難所、安全基地、近接性の維持、恋人関係の評価に負の相関関係がみられた。友人への情報資源の分配と恋人の安全な避難所、安全基地、近接性の維持、恋人関係の評価に負の相関関係がみられた。友人への物品資源の分配と恋人の安全な避難所、近接性の維持、恋人関係の評価に負の相関関係がみられた。

Table 2 恋人との関係認知と  
二番目に親しい同性の友人との RCI の相関

	恋人との関係の認知			
	愛着機能因子			恋人との 関係評価
	安全な 避難所	安全 基地	近接性 維持	
1ヶ月に会う回数	.08	.12	-.03	.04
R 1回あたりに過ごす時間	.01	.03	.12	.05
C 1ヶ月の電話回数	-.24 **	-.18 **	-.18	-.20 *
I 1回の通話時間	.02	-.06	.08	.05
1週間のメール送受信数	-.15	-.10	-.06	-.09
愛情	-.29 **	-.22 *	-.35 ***	-.31 ***
地位	-.22 *	-.31 ***	-.16 †	-.21 **
サービス	-.29 **	-.20 *	-.28 **	-.37 ***
金銭	-.07	.00	-.17	-.13
情報	-.28 **	-.14	-.14	-.32 ***
物品	-.20 *	-.11	-.25 **	-.32 ***

注) †  $p < .10$ , \*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$

### 恋人への愛着機能認知と友人関係の評価が友人の行動に及ぼす影響

恋人とも友人とも関係が良好であると認知している人が、一番友人の行動が多いのかを検討するために、恋人の愛着機能の認知と友人関係の評価をそれぞれ高群と低群に分ける。愛着機能については愛着機能の各因子の因子得点が 0 より大きい人を高群、0 より小さい人を低群と分け、友人の関係評価は中央値で高群と低群に分けた。各群の人数については Table 3 に示した。

その上で、愛着機能各因子と友人の関係評価を独立変数、友人との行動を従属変数とする二要因の分散分析を行った。まず一番親しい友人における結果について、有意な結果が得られた変数は会う回数、電話回数、通話時間、メール送受信数、愛情資源であった。

会う回数では安全な避難所と関係評価で関係評価に主効果が( $F(1, 121) = 5.65, p < .05$ )、安全基地と関係評価で関係評価に主効果が( $F(1, 121) = 5.61, p < .05$ )、近接性の維持と関係評価で関係評価に主効果がみられた( $F(1, 121) = 5.42, p < .05$ )。それぞれ友人との関係評価高群の方が低群より友人と会う回数が多いという結果となった。

Table 3 安全な避難所因子、安全基地因子、近接性の維持因子の高低と一番親しい友人との関係評価高低の人数

	友人関係の評価		
	高群	低群	
安全な 避難所	高群	49	52
	低群	13	12
安全 基地	高群	50	48
	低群	12	16
近接性 の維持	高群	52	49
	低群	12	15

電話回数において近接性の維持と関係評価に交互作用がみられ( $F(1, 120) = 4.95, p < .05$ )、近接性の維持高低の単純主効果と友人関係評価高低の単純主効果を検討したところ、近接性の維持高低の単純主効果は関係評価高群に対して有意であり( $F(1, 120) = 6.58, p < .05$ )、関係評価の単純主効果は近接性の維持低群に対して有意であった( $F(1, 120) = 7.75, p < .01$ ; Figure 2)。関係評価高群において近接性の維持高群より近接性の維持低群の方が電話回数が多く、近接性の維持低群において関係評価低群より関係評価高群の方が電話回数が多かった。

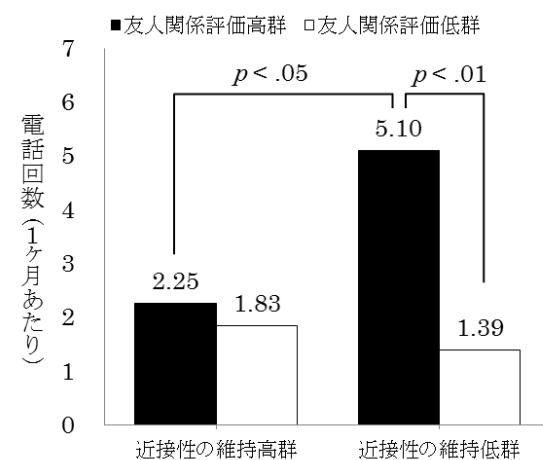


Figure 2 近接性の維持高低と友人関係評価高低での電話回数の平均の比較

通話時間については安全基地と関係評価に交互作用がみられた( $F(1, 116) = 5.07, p < .05$ )。安全基地高低の単純主効果と友人関係評価高低の単純主効果を検討したところ、安全基地高低の単純主効果は関係評価高群に対して有意であり( $F(1, 120) = 5.26, p < .05$ )、関係評価高低の単純主効果は安全基地低群に対して有意で

あった( $F(1, 120) = 7.01, p < .01$ ; Figure 3)。関係評価高群において安全基地高群より安全基地低群の方が長い時間電話しており、安全基地低群において関係評価低群より高群の方が長い時間電話していた。メールの送受信数において近接性の維持と関係評価に交互作用がみられ( $F(1, 118) = 4.81, p < .05$ )、近接性の維持高低の単純主効果と友人関係評価高低の単純主効果を検討したところ、近接性の維持高低の単純主効果は関係評価高群に対して有意であり( $F(1, 120) = 2.79, p < .10$ )、関係評価の単純主効果は近接性の維持低群に対して有意であった( $F(1, 120) = 4.51, p < .05$ ; Figure 4)。関係評価高群において近接性維持高群より低群の方がメール送受信数が多く、近接性の維持低群において関係評価低群より高群の方がメール送受信数が多かった。

愛情において安全な避難所と関係評価で関係評価に主効果がみられ( $F(1, 111) = 5.23, p < .05$ )、関係評価高群の方が友人へ愛情資源を分配していた。また安全

基地と関係評価で関係評価に主効果がみられ( $F(1, 111) = 5.50, p < .05$ )、関係評価高群の方が友人へ愛情資源を分配していた。近接性の維持と関係評価では近接性の維持( $F(1, 111) = 6.41, p < .05$ )と関係評価( $F(1, 111) = 4.74, p < .05$ )に主効果がみられ、近接性の維持低群の方が高群より愛情資源を分配し、関係評価高群の方が低群より愛情資源を分配していた。

次に二番目に親しい友人における結果である。先に各群の人数を Table 4 に示す。

二番目に親しい友人において有意な結果が得られたのは過ごす時間、電話回数、メール送受信数、全資源であった。

まずはRCIの結果を示す。過ごす時間においては安全基地と関係評価で交互作用( $F(1, 116) = 5.08, p < .05$ )がみられ、安全基地高低の単純主効果と友人関係評価高低の単純主効果を検討したところ、関係評価高低の単純主効果では安全基地高群( $F(1, 116) = 2.95, p < .10$ )と低群( $F(1, 116) = 11.34, p < .01$ )に対してそれぞれ有意であった。安全基地高群において関係評価低群( $M = 253.87, SD = 196.70$ )よりも高群( $M = 328.57, SD = 199.32$ )の方が過ごす時間が長く、安全基地低群において関係評価低群( $M = 157.81, SD = 117.29$ )よりも高群( $M = 453.33, SD = 402.62$ )の方が過ごす時間が長かった。電話回数において安全な避難所と関係評価で安全な避難所に主効果がみられた( $F(1, 116) = 5.99, p < .05$ )。安全な避難所低群の方が高群よりも電話回数が多いことが示された。メール送受信数において安全な避難所と関係評価で安全な避難所に主効果がみられた( $F(1, 113) = 7.31, p < .01$ )。安全な避難所低群の方が高群よりもメール送受信数が多いことが示された。

次に資源の分配についての結果を示す。愛情において安全基地と関係評価で関係評価に主効果がみられた( $F(1, 111) = 6.24, p < .05$ )。関係評価高群の方が低群よりも愛情資源を分配していた。また近接性の維持と関係

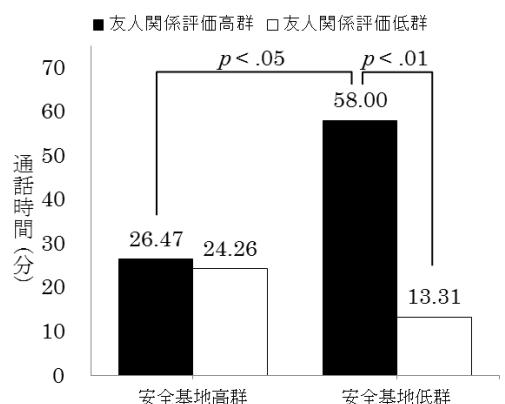


Figure 3 安全基地の維持高低と友人関係評価高低での通話時間の平均の比較

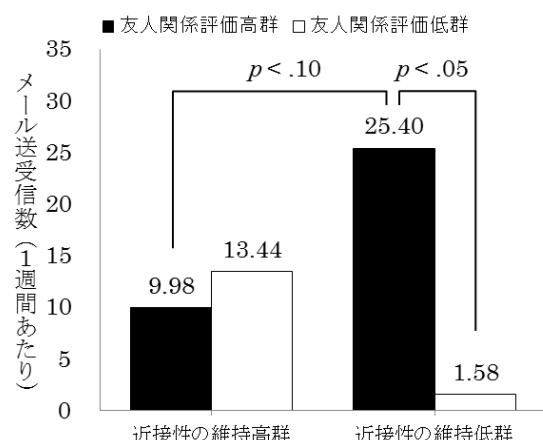


Figure 4 近接性の維持高低と友人関係評価高低でのメール送受信数の平均の比較

Table 4 安全な避難所因子、安全基地因子、近接性の維持因子の高低と二番目に親しい友人ととの関係評価高低の人数

	友人関係の評価	
	高群	低群
安全な 避難所	高群	43
	低群	9
安全 基地	高群	43
	低群	9
近接性 の維持	高群	44
	低群	8

評価で近接性の維持に主効果が ( $F(1, 111) = 15.06, p < .001$ )、関係評価に主効果がみられた ( $F(1, 111) = 9.01, p < .001$ )。近接性の維持低群の方が高群よりも愛情資源を分配しており、関係評価高群の方が低群よりも愛情資源を分配していた。

地位において安全な避難所と関係評価の関係評価に主効果がみられた ( $F(1, 110) = 8.65, p < .01$ )。関係評価高群の方が低群よりも地位資源を分配していた。安全基地と関係評価の安全基地に主効果 ( $F(1, 110) = 5.36, p < .05$ )、関係評価に主効果 ( $F(1, 110) = 9.84, p < .01$ ) がみられた。安全基地低群の方が高群よりも地位資源を分配しており、関係評価高群の方が低群よりも地位資源を分配していた。さらに近接性の維持と関係評価の関係評価に主効果 ( $F(1, 110) = 9.23, p < .01$ ) がみられた。関係評価高群の方が低群よりも地位資源を分配していた。

サービスにおいて安全な避難所と関係評価で安全な避難所に主効果 ( $F(1, 111) = 12.50, p < .001$ ) がみられた。安全な避難所低群の方が高群よりもサービス資源を分配していた。また近接性の維持と関係評価で近接性の維持に主効果がみられ ( $F(1, 111) = 8.22, p < .01$ )、近接性の維持低群の方が高群よりもサービス資源を分配していた。

金銭において安全な避難所と関係評価に交互作用がみられ ( $F(1, 111) = 6.04, p < .05$ )、安全な避難所高低の単純主効果と友人関係評価高低の単純主効果を検討したところ、安全な避難所高低の単純主効果は関係評価高群に対して有意であり ( $F(1, 111) = 4.09, p < .10$ )、関係評価の単純主効果は安全な避難所 ( $F(1, 111) = 2.84, p < .10$ ) と低群に対して有意であった ( $F(1, 111) = 3.69, p < .10$ )。関係評価高群において安全な避難所高群 ( $M = 2.02, SD = 1.32$ ) の方が低群 ( $M = 0.79, SD = 1.05$ ) よりも金銭資源を分配しており、安全な避難所高群において関係評価高群の方が低群 ( $M = 1.46, SD = 1.39$ ) よりも金銭資源を分配し、安全な避難所低群において関係評価低群の方が高群よりも金銭資源を分配していた。

情報において安全な避難所と関係評価で安全な避難所に主効果がみられ ( $F(1, 112) = 5.10, p < .05$ )、安全な避難所低群の方が高群よりも情報資源を分配していた。

物品において近接性の維持と関係評価で近接性の維持に主効果がみられ ( $F(1, 112) = 5.27, p < .05$ )、近接性の維持低群の方が高群よりも物品資源を分配していた。

## 考察

本研究では恋人関係の認知が友人と行動にどのように影響を及ぼすのかを検討し、また恋人関係の認知だけでなく友人関係の認知も同時に捉え、それらの認知が友人との行動にどう影響を及ぼすのかについて検討した。その結果、仮説とは異なる結果が得られた。

まず恋人関係の認知と友人の行動の関連では、恋人の愛着機能の認知が高いほど、または恋人関係が安定していると認知しているほど電話回数が減り、愛情資源、地位資源、情報資源を分配しなくなるという、消極的ともいえる行動特徴が示された。

直接会うという対面状況やメールでは変化が認められず電話回数でのみ結果が得られたのは、コミュニケーションツールの役割による違いであると考えられる。岡本・高橋(2006)によると、親しい相手と相互作用を行う際に最も円滑なのは対面状況である。本研究において対面状況で変化が現れなかったのは、友人と関わるのに一番行きやすい対面状況でのコミュニケーションが、恋人関係が安定しているかどうかに關係なく行われたためであると考えられる。またフルタイム・インティメート・コミュニケーションのような対人関係は、メールによって実現され(中村, 2001)、利便性も高い(仁尾他, 2009)ことから、恋人と関係を維持しながら友人の関係も維持するためにメール行動が多用されたと考えられる。このことから対面状況と同じように恋人関係が安定しているかどうかに關係なく行われたのではないかと考えられる。一方、電話によるコミュニケーションは日常的な対面的相互作用での不全の補償を行えるツール(諸井, 1995)であることから、友人関係にとっては重要であるが、メールよりも利用頻度が少ない(新美, 2009)。つまり、相手との親密さを保つツールとして普段のコミュニケーションに対してより補完的な意味合いをもっているといえよう。そのため恋人との関係が安定していないと認知した場合、恋人から得られない安心感などを友人によって補完し、恋人との関係が安定していると認知すれば、友人にに対する行動の中で重要度の低い電話によるコミュニケーションが減少したのではないかと考えられる。

愛情資源の分配については、恋人関係が重要であり、その関係に満足しているため、恋人への愛情がより多く分配されるために友人への愛情資源が減り、恋人関係が重要でないと認知していれば、友人へ資源が分配されるという結果になったと考えられる。地位資源において本研究では、励ます、立場を尊重するなどの例を挙げていた。これらの行為について中島(2006)は、愛情資源と混同されやすいことを指摘している。そのため愛情と同じような結果が得られたのだと考えられる。また情報資源においては恋人に安心感を抱けるほど関わりが深くなっている分、恋人に情報資源を分配し友人への分配が減少したと考えられる。本研究で取り扱った情報資源は“試験

の内容を伝える”、“試験の内容を伝える”、“試験の内容を伝える”、“道や場所を教える”などの口頭で簡単に伝えられるものであるため、恋人との関わりが深いほどに資源を提供したのだと考えられるであろう。

また恋人への愛着機能認知と友人関係の評価が友人との行動に及ぼす影響においても仮説は支持されなかつた。回数や時間の側面において、友人関係の評価と恋人の愛着機能認知の両方が影響を与えていたのは一番親しい友人における電話回数、通話時間、メール送受信数であった。また二番目に親しい友人において友人関係の評価による影響はみられないものの、恋人の愛着機能認知が影響を及ぼしていたのは電話回数とメール送受信数であった。このことから恋人から安心感を得ているかどうか、恋人との関係が安定しているかどうかは、会わなくとも連絡が取れる手段の利用回数に影響を及ぼしていることがうかがえる。これは対面コミュニケーションを補完するような電話・メール行動によって、恋人で埋められない部分を補完するために行われた行動だと考えることができる。さらに一番親しい友人においては友人との関係評価が高いほどこの行動が行われていたが、そのような結果は二番目に親しい友人では得られなかつた。このことから二番目に親しい友人においては、友人関係が重要かどうかに問わらず友人から何かしらのサポートを受けようとしているのではないか、と考えられる。

次に資源の側面において、友人関係の評価と恋人の愛着機能の認知がともに影響を及ぼしていたのは二番目に親しい友人における金銭資源のみであった。また、一番親しい友人でも二番目に親しい友人でも両方に結果が得られたのは愛情資源のみであった。愛情資源は恋人に分配しやすい分、友人への資源が減少するのであろう。また一番親しい友人においては恋人の愛着機能認知のみが影響しているのに対し、二番目に親しい友人では友人関係の評価も影響を及ぼしている。これらのことから愛情を与えるという行為について、一番親しい友人においては参加者自身の中でその友人が一番親しいと認識できるほどに愛情を注いでいたが、二番目に親しい友人に関してはその友人と今後の関係性の予期が影響を及ぼしてくると考えられる。

本研究においてはいづれの仮説も支持されなかつたことから、恋人の愛着機能だけではなく、さらなる要因の検討が必要であるといえよう。例えば、恋人の愛着機能認知が低い場合と高い場合に分けて考えると、恋人の愛着機能の認知が低い場合、恋人の愛着機能が低く、関係継続の意志がある場合、関係を継続させるために恋人に資源を割き友人と行動が減ると考えられる。そのため、愛着機能の認知だけでなく、関係の継続意志をともに検討する必要がある。恋人の愛着機能の認知が高

い場合、“恋人関係が絶対に壊れることはない”という安心感を検討する必要があると考えられる。これは幼児期と成人期での愛着機能の違いが関係していると考えられる。戸田(1998)によると親子の関係は多くの場合、保護されるものと保護するものという保護・被保護的関係にあるのに対して、恋愛関係は基本的に台頭な立場と勢力をを持つ二者関係であるという。つまり子どもの場合は親に保護を求め、そこから安心感を得ているが、親から保護を求められることはない。しかし恋人同士の場合は保護を求め安心感を得ているが、自分自身も恋人を保護し、安心感を与える存在でなければならない。そのためお互いに安心感を与え合わなければならず、恋人関係が安定していると認知しても自然と恋人に割く時間や資源が増えるのではないかと考えられる。もし友人と活動を増やすようになるとすれば、それは十分に安心感を与え合い、たとえ地理的に離れていてもこの関係は絶対に壊れないという自信のような、恋人関係に対する確信が持てた場合に限られるのではないかと考えられる。

本研究では恋人関係の認知による友人と行動への影響を回数・時間や資源という側面から捉えることで、恋愛関係研究と友人関係研究に貢献したといえるであろう。恋人の愛着機能の認知が低いほど友人との行動、特に電話回数や愛情資源が増え、恋人の愛着機能の認知が低く、友人関係の評価が高い人が電話行動、メール行動が多いことが示された。しかしながら、本研究では電話・メールの内容や過ごす時間にどのような行動が行われていたかについては検討していない。実際に電話行動によって恋人から得られない安心感を友人から得ているかどうかについては内容も検討する必要があるであろう。このことは今後の課題といえよう。

## 引用文献

- Aron, A., Paris, M., & Aron, E. N. (1995). Falling in love: Prospective studies of self-concept change. *Journal of Personality and Social Psychology*, **69**, 1102-1112.
- Berscheid, E. (1983). Emotion. In H. H. Kelley, E. Berscheid, A. Christensen, J. H. Harvey, T. L. Huston, G. Levinger, E. McClintock, L. A. Peplau, & D. R. Peterson (Eds) *Close relationships*. New York: Freeman. pp.110-168.
- Berscheid, E., Snyder, M., & Omoto, A. M. (1989). The relationship closeness inventory: Assessing the closeness of interpersonal relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, **57**, 792-807.
- Bowlby, J. (1969/1982). *Attachment and loss*, Vol. 1: Attachment. London: The Hogarth Press.  
(ボウルビィ, J. 黒田実郎・大羽泰・岡田洋子・黒田聖一(訳) (1976/1991). 母子関係の理論 I 愛着行動(新版) 岩崎学術出版社)
- Davis, K. K. (1985). Near and dear: Friendship and

- love compared. *Psychological Today*, **19**, 22-30.
- 得能真理香・佐藤有耕 (2010). 青年期の異性交際の特徴と異性交際による友人関係の変化 日本教育心理学会総会発表論文集, 306.
- Foa, U. G., & Foa, E. B. (1974). *Societal structures of the mind*. Springfield, III:Thomas.
- Hazan, C., & Shaver, P. R. (1987). Romantic love conceptualized as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 511-524.
- 神蔭紀幸・黒川正流・坂田桐子 (1996). 青年の恋愛関係と自己概念及び精神的健康の関連 広島大学総合科学部紀要IV理系編, **22**, 93-104.
- 河合隼雄 (1971). 時間にについて 幼児の教育, **70**, 16-22.
- 北原香緒里・松島公望・高木英明 (2008). 恋愛関係が大学生のアイデンティティ発達に及ぼす影響 横浜国立大学教育人間科学部紀要I(教育科学), **10**, 91-114.
- 久保真人 (1991). 親密な関係とその行動特性 大阪教育大学紀要, **39**, 265-270.
- 久保真人 (1993). 行動特性からみた関係の親密さ—RCI の妥当性とその限界— 実験社会心理学研究, **33**, 1-10.
- 松田幸弘 (2004). 大学生の携帯電話に対する態度を規定する心理的要因の分析 大阪経大論集, **55**, 59-89.
- 諸井克英 (1995). 女子短大生における孤独感と電話コミュニケーション 人文論集, **45**, 1-17.
- 仲島一郎・姫野圭一・吉井博明 (1998). 携帯電話の普及とその社会的意味 情報通信学会誌, **16**(3), 79-91.
- 中島 誠 (2006). 資源交換理論に基づく資源分類の再考 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, 心理発達科学, **53**, 163-170.
- 中村 功 (2001). 携帯メールの人間関係 東京大学社会情報研究所(編) 日本の情報行動 2000 東京大学出版会 285-303.
- 中村雅彦 (1991). 大学生の異性関係における愛情と関係評価の規定因に関する研究 実験社会心理学研究, **31**, 132-146.
- 新美明夫 (2009). 「若年層の友人関係における携帯電話利用」研究—その外観と大学生の経年的調査による検討 — 愛知淑徳大学論集 コミュニケーション学部・心理学研究科学篇— **9**, 89-102.
- 仁尾友紀・石田弓・内海千種 (2009). 大学生の携帯メール依存について—友人関係におえる不安との関連— 徳島総合科学部人間科学研究, **17**, 73-90.
- 西平直喜 (1973). 青年心理学 塚田毅(シリーズ編) 現代心理学叢書7 共立出版
- 西平直喜 (1990). 成人になること: 成育史心理学から 東京大学出版会
- 岡本 香・高橋 超 (2006). 親密度の違いおよびコミュニケーション携帯の違いがメディア・コミュニケーション観に及ぼす影響 実験社会心理学研究, **45**, 85-97.
- 多川則子 (2003). 恋愛関係が青年に及ぼす影響についての探索的研究—対人関係観に着目して— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 心理発達科学, **50**, 251-267.
- 多川則子・吉田俊和 (2006). 日常的コミュニケーションが恋愛関係に及ぼす影響 社会心理学研究, **22**, 126-138.
- 高井範子 (2008). 青年期における人間関係の悩みに関する検討 太成学院大学紀要, **10**, 85-95.
- 谷口淳一 (2004). RCI の改訂と妥当性についての検討—RCIで測定される関係の親密さとは?— 対人社会心理学研究, **4**, 57-68.
- 戸田弘二 (1998). アタッチメント理論から見た恋愛 松井豊(編) 恋愛の心理—データは恋愛をどこまで説明したか— 現代のエスプリ, 368, 至文堂 184-197.
- 山口正寛 (2009). 愛着機能尺度(Attachment-Function Scale)作成の試み パーソナリティ研究, **17**, 157-167.

## 註

- 1) 本論文は、第一著者の修士論文(平成 23 年度大阪大学大学院人間科学研究科)の一部に加筆修正したものである。

## The effect of romantic relationship on individuals' behavior toward their friends

Yuko SHIMIZU (Graduate School of Human Sciences, Osaka University)

Ikuo DAIBO (Graduate School of Human Sciences, Osaka University)

The purpose of this study is to investigate the effect of romantic relationship on individuals' behavior toward their friends as well as the importance of friendship in such process. As behavioral indexes, the frequency and duration of behavior (e.g., texting) and distribution of resources (e.g., affection, status) toward person in close relationships were employed. One hundred and thirty five undergraduates who have romantic partners completed the questionnaires about their partners and same-sex friends (i.e., closest friend, second closest friend). The results showed that perceived attachment function of their romantic partners was negatively correlated with, how often they would call and how much they would invest affection toward their friends. This tendency was more apparent toward second closest friends. And, those who perceived attachment function of their romantic partners to be relatively low and rated their friendships to be important were more likely call and text their friends. This interaction effect was found only with closest friends. Attachment function of romantic partner was discussed in relation to individuals' behavior toward their friends.

Keywords: romantic relationship, attachment function, individuals' behavior toward friends, distribution of resource.